

## 河北省県志にみる入声についてⅡ

矢澤 秀昭

### Ⅲ 特殊帰入例

表Ⅲ

例	1 学読作鴉
地域	靈寿 元氏 新樂 平山 獲鹿 定 贊皇 寧河 獻 玉田
例	2 獲読作槐
地域	靈寿 元氏 新樂 平山 獲鹿 定 贊皇 寧河
例	3 墨読作美
地域	靈寿 新樂 平山 贊皇 内丘
例	4 墨読作妹
地域	獻 元氏
例	5 墨読作味
地域	定 獲鹿
例	6 黙読作妹
地域	獻
例	7 箔読作鑣
地域	靈寿 新樂 元氏 贊皇

例	8 国読作果
地域	遷安 猷 玉田
例	9 国読作鬼
地域	霊寿 新楽 平山 贊皇 定 獲鹿 猷
例	10 国読作鍋
地域	寧河
例	11 国読作果平声
地域	玉田
例	12 国読作鬼入声
地域	元氏
例	13 徳読作堆上声
地域	霊寿 新楽
例	14 徳当何切 当微切
地域	遷安 猷
例	15 徳読作対平声
地域	獲鹿
例	16 徳登河切
地域	玉田
例	17 的読作堆上声
地域	霊寿 新楽

例	18 略読作料
地域	靈寿 新樂 平山 元氏 贊皇 定 獲鹿 遷安 獻 寧河
例	19 索読作掃
地域	靈寿 新樂 贊皇
例	20 索読作掃入声
地域	元氏
例	21 肉読作柔去声
地域	獲鹿 元氏 玉田
例	22 閣読作稿
地域	靈寿 新樂 平山 贊皇 定 寧河 元氏
例	23 筆読作碑
地域	獻 大名
例	24 筆読作背
地域	内丘
例	25 日読作異
地域	内丘
例	26 脱通何切
地域	遷安 獻
例	27 托通何切
地域	遷安 獻

例	28 惑読作毀
地域	獲鹿
例	29 鶴読作蒿
地域	寧河
例	30 豁読作荷
地域	猷
例	31 黒読作荷
地域	猷
例	32 弱日耀切
地域	猷
例	33 若日耀切
地域	猷
例	34 約読作要
地域	玉田 遷安
例	35 約読作耀
地域	猷
例	36 蜀読近南音儒
地域	靈寿 新樂 贊皇
例	37 熟読近南音儒
地域	靈寿 新樂 贊皇

例	38 属読近南音儒
地域	霊寿 新楽 贊皇
例	39 贖読近南音儒
地域	霊寿 新楽 贊皇
例	40 述読近南音儒
地域	霊寿 新楽 贊皇
例	41 梳読近南音儒
地域	霊寿 新楽 贊皇
例	42 菽読近南音儒
地域	霊寿 新楽 贊皇
例	43 足読近南音沮
地域	霊寿 新楽 贊皇
例	44 族読近南音左
地域	霊寿 新楽 贊皇
例	45 卒読近南音左
地域	霊寿 新楽 贊皇
例	46 托読近南音外套
地域	霊寿 新楽 贊皇
例	47 殻読近南音巧
地域	新楽 贊皇

例	48 軸読近猪
地域	霊寿 新楽 平山
例	49 粥読近猪
地域	霊寿 新楽 平山
例	50 粥読作周入声
地域	元氏
例	51 粥読作朱之類
地域	大名
例	52 逐読作朱之類
地域	大名
例	53 竹読作朱之類
地域	大名
例	54 燭読作朱之類
地域	大名
例	55 物読近五
地域	霊寿 新楽 贊皇
例	56 勿読近五
地域	霊寿 新楽 贊皇
例	57 役読近異
地域	霊寿 新楽 贊皇 平山

例	58 雜読作咱之類
地域	大名
例	59 福読近府
地域	靈寿 新樂 贊皇 内丘
例	60 伏読近南音腐
地域	靈寿 新樂 贊皇
例	61 仏夫何切
地域	遷安 猷
例	62 活読作和
地域	大名 猷
例	63 血読作捨
地域	寧河
例	64 雪許耶切
地域	猷
例	65 宿読作戌
地域	獲鹿
例	66 俗読作戌
地域	獲鹿
例	67 筆読作北
地域	元氏

例	68 墨讀作密
地域	寧河 玉田
例	69 闊讀作渴
地域	靈壽 新樂 贊皇 寧河
例	70 括讀作渴
地域	靈壽 新樂 贊皇
例	71 德讀作的
地域	贊皇
例	72 郭讀作葛
地域	靈壽 新樂 贊皇 寧河
例	73 合讀作葛
地域	靈壽 新樂 贊皇
例	74 八讀作卜
地域	獲鹿
例	75 入讀作肉
地域	靈壽 新樂 贊皇 定 平山
例	76 額讀作葉
地域	靈壽 新樂 贊皇 定 元氏
例	77 客讀作法
地域	靈壽 新樂 贊皇 平山 元氏



例	78 恰読作法
地域	獲鹿
例	79 卓竹沃切
地域	猷
例	80 覆読作福
地域	獲鹿
例	81 結読作甲
地域	獲鹿
例	82 酌読作哲
地域	獲鹿
例	83 籍読作節
地域	獲鹿
例	84 隔読作潔
地域	霊寿 新楽 贊皇 平山 元氏 内丘 獲鹿
例	85 格読作潔
地域	霊寿 新楽 贊皇 平山 元氏 内丘

ここでも、《中原音韻》と現代音を以て比較検討してみる。

1例をみる。「鴉」は《中原音韻》では、陰平声の蕭豪韻〔xiəu〕にあり（注1）、現代音でも陰平声〔ɕiau〕である。「学」は《中原音韻》では、陽平声の蕭豪韻〔xau〕と陽平声の歌戈韻〔xio〕に帰入している。現代音

では陽平声〔ɕyɛ〕に帰入している。現代音における〔-yɛ〕韻の来源は（注2）、中古音において入声韻であったものがほとんどである。すなわち月、薛、屑、物、業、藥、覺韻に属していたものである。「学」は覺韻に属し、覺韻は（注3）〔-ɔk〕→〔-iak〕→〔-io〕と時代を下るにつれ変化し現代音では〔-yɛ〕となるが、また〔-iak〕の時点で韻尾の代替変化によって〔-iak〕から〔-iau〕になることもある。（注4）1例の地域では、韻尾の代替変化を反映しているといえる。

2例をみる。「槐」は《中原音韻》では陽平声の皆来韻〔xuai〕にあり、現代音でも陽平声〔xuai〕である。「獲」は《中原音韻》に記載がない。現代音では、全濁声母の例外として去声〔xuo〕に帰入している。「獲」は中古音において麦韻に属し、麦韻は〔-ɛk〕→〔-wɛk〕→〔-ɔk、-uɔk〕→〔-o、-uo〕と時代を下るにつれ変化をし、現代音では〔-o、-uo〕となる。（注5）2例の地域では韻尾の代替変化によって〔-uɔk〕から〔-uai〕となったものと思われる。（注6）

3から6例をまとめてみる。「墨」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の齊微韻〔mei〕に帰入している。現代音でも去声〔mo〕に帰入している。「黙」は《中原音韻》には記載がないが「墨」と同音系であり、現代音では去声に帰入している。「美」は《中原音韻》では上声の齊微韻〔mei〕にある。現代音でも上声〔mei〕である。「妹」は《中原音韻》では去声の齊微韻〔mei〕にある。現代音でも去声〔mei〕である。「昧」は《中原音韻》では去声の齊微韻〔mei〕にある。現代音でも去声〔mei〕である。これらの例は各地域とも《中原音韻》に近いといえる。

7例をみる。「箔」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の歌戈韻〔po〕に帰入している。現代音でも陽平声〔po〕に帰入している。「鑣」は《中原音韻》には記載がない。現代音では陰平声〔piau〕である。この例は韻尾の代替変化の問題である。

8から12例をまとめてみる。「国」は清声母であるから《中原音韻》で

は、上声の齊微韻〔kuei〕に帰入している。現代音では陽平声〔kuo〕に帰入している。「果」は《中原音韻》では上声の歌戈韻〔kuo〕にある。現代音でも上声〔kuo〕である。「鬼」は《中原音韻》では上声の齊微韻〔kuei〕にある。現代音でも上声〔kuei〕である。「鍋」は《中原音韻》では陰平声の歌戈韻〔kuo〕にある。現代音でも陰平声〔kuo〕である。この例は、河北省の東部と南西部の違いが明瞭である。すなわち、東部では入声韻尾〔-k〕の脱落変化により〔-uo〕韻となった。玉田、寧河では声調も現代音に近い。南西部では入声韻尾〔-k〕の代替変化により〔-uei〕韻となった。元氏にあっては明確に入声の存在を示しているのは注目に値すべき点である。

13から16例をまとめてみる。「徳」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の齊微韻〔tei〕に帰入している。現代音では陽平声〔ty〕に帰入している。「堆」は《中原音韻》では上声の齊微韻〔tuei〕にある。現代音では陰平声〔tuei〕である。ここでは「上声」と補注があるので「堆」は上声ではなかったのであろう。「当何切」は《中原音韻》では陽平声の歌戈韻〔to〕となる。現代音でも陽平声〔ty〕となる。「当微切」は《中原音韻》では陽平声の齊微韻〔ti〕となる。現代音では陰平声〔tuei〕となる。「対」は《中原音韻》では齊微韻の去声〔tuei〕にある。現代音でも去声〔tuei〕である。「平声」と補注があるので「対」は去声であったのであろう。「登河切」は《中原音韻》では陽平声の歌戈韻〔to〕となる。現代音でも陽平声〔ty〕になる。この例は入声韻尾〔-k〕の脱落変化と代替変化の違いがあらわれている。大まかにいえば、東部では代替変化となり、西部では脱落変化あるいは脱落変化と代替変化の二音を有した。

17例をみる。「的」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の齊微韻〔ti〕に帰入している。現代音では去声〔ti〕に帰入している。この例は声調では《中原音韻》に近いといえる。

18例をみる。「略」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の歌

戈韻 [lio] に帰入している。現代音でも去声 [lyɛ] に帰入している。「料」は《中原音韻》では去声の蕭豪韻 [liəu] にある。現代音でも去声 [liɑu] である。この例は1例と同様に葉韻の韻尾の代替変化を反映している例である。

19、20例をみる。「索」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の皆来韻 [ʃai] と蕭豪韻 [sau] に帰入している。現代音でも上声 [suo] に帰入している。「掃」は《中原音韻》では上声の蕭豪韻 [sau] にある。現代音でも上声 [sau] である。東部地域の寧河では「索読作鎖」とあり、これは現代音に近く、20例の元氏に「入声」と補注もあり、中古鐸韻の [-au] 韻化とともに注目すべきものである。

21例をみる。「柔」は《中原音韻》では陽平声の尤侯韻 [jiəu] にある。現代音でも陽平声 [zou] である。「肉」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の尤侯韻 [jiəu] に帰入している。現在では「肉」は去声 [zou] に統一されているが「国音字典」などでは、語音で去声 [zou]、読音で去声 [zu] の二音がある。(注7) この例は現代音に近いといえるが、75例とあわせてみると、文白異読の資料とみなすことができる。

22例をみる。「閣」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の蕭豪韻 [kau] に帰入している。現代音では陽平声 [kɤ] に帰入している。「稿」は《中原音韻》では上声の蕭豪韻 [kau] にある。現代音でも上声 [kau] である。この例は《中原音韻》に近いといえる。

23、24例をみる。「筆」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の齊微韻 [pei] に帰入している。現代音では上声 [pi] に帰入している。「碑」は《中原音韻》では陰平声の齊微韻 [pei] にある。現代音でも陰平声 [pei] である。「背」は《中原音韻》では去声の齊微韻 [pei] にある。現代音では去声 [pei] と陰平声 [pei] の二音がある。この例は《中原音韻》に近いが、新楽、獲鹿、寧河、定、贊皇、靈寿、平山、玉田の地域では「筆読作彼」と音注してあり、これらの地域では現代音に近いといえる。

25例をみる。「日」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の齊微韻〔zi〕に帰入している。現代音でも去声〔zɿ〕に帰入している。「異」は《中原音韻》では去声の齊微韻〔i〕にある。現代音でも去声〔i〕である。声母が脱落した例である。

26、27例をみる。「脱」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の歌戈韻〔t'uo〕に帰入している。現代音では陰平声〔t'uo〕に帰入している。「托」は《中原音韻》には記載がない。現代音では陰平声〔t'uo〕に帰入している。「通何切」は《中原音韻》では陽平声の歌戈韻〔t'o〕となる。現代音でも陽平声〔t'y〕となる。中古鐸、末韻が歌戈韻に合流した例である。

28例をみる。「惑」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の齊微韻〔xuei〕に帰入している。現代音では去声〔xuɔ〕に帰入している。「毀」は《中原音韻》では上声の齊微韻〔xuei〕にある。現代音でも上声〔xuei〕である。この例は《中原音韻》に近いといえる。

29例をみる。「鶴」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の蕭豪韻〔xau〕と歌戈韻〔xo〕に帰入している。現代音では去声〔xy〕に帰入している。「蒿」は《中原音韻》では陰平声の蕭豪韻〔xau〕にある。現代音でも陰平声〔xau〕である。《中原音韻》に「鶴」に二音あるように、「国音字典」にも語音で陰平声〔xau〕と読音で去声〔xy〕の二音が記されている。この例は韻尾の代替変化によって二音に分かれた例である。

30、31例をみる。「荷」は《中原音韻》では陽平声の歌戈韻〔xo〕にある。現代音では去声〔xy〕である。「豁」は《中原音韻》には記載がない。現代音では陰平声〔xuɔ〕と去声〔xuɔ〕に帰入している。「黒」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の齊微韻〔xei〕に帰入している。現代音では陰平声〔xei〕に帰入している。この例は入声韻尾の脱落変化を反映している。

32、33例をみる。「弱」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声

の蕭豪韻〔zieu〕と歌戈韻〔zio〕に帰入している現代音では去声〔zuo〕に帰入している。「若」の帰入情況は《中原音韻》と現代音ともに「弱」とまったく同じである。「日耀切」は《中原音韻》では去声の蕭豪韻〔zieu〕となる。現代音では去声〔zuau〕となる。「若」、「弱」はともに中古葉韻に属し、葉韻は〔-uo〕韻化するものと、より読音的な〔-au〕韻化するものに分かれた。この例は後者である。

34、35例をみる。「約」は零声母で《中原音韻》では、去声の蕭豪韻〔ieu〕に帰入している。現代音では陰平声〔iau〕と〔ye〕に帰入している。「要」は《中原音韻》では去声と陰平声の蕭豪韻〔ieu〕にある。現代音でも去声と陰平声〔iau〕がある。「耀」は《中原音韻》では去声の蕭豪韻〔ieu〕にある。現代音でも去声〔iau〕である。この例は18例と同様に中古葉韻入声韻尾の代替変化を反映している。

36から42例をまとめてみる。「蜀」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の魚模韻〔ʃu〕に帰入している。現代音では上声〔ʃu〕に帰入している。「熟」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の魚模韻〔ʃu〕に帰入している。現代音でも陽平声〔ʃu〕に帰入している。「属」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の魚模韻〔ʃiu〕に帰入している。現代音では上声〔ʃu〕に帰入している。「贖」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の魚模韻〔ʃiu〕に帰入している。現代音でも陽平声〔ʃu〕に帰入している。「述」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の魚模韻〔ʃiu〕に帰入している。現代音では去声〔ʃu〕に帰入している。「稭」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の魚模韻〔ʃiu〕に帰入している。現代音でも陽平声〔ʃu〕に帰入している。「菽」は清声母で《中原音韻》では上声の魚模韻〔ʃiu〕に帰入している。現代音では陰平声〔ʃu〕に帰入している。「儒」は《中原音韻》では陽平声の魚模韻〔ziu〕にある。現代音でも陽平声〔zu〕である。これらの例で問題となる点は「近南音」という補注である。「南音」

とはどの地域で、それが声母、韻母、声調いずれに対するものなのか判然としない。靈寿、新樂、贊皇以外の地域の例を挙げれば、元氏では「蜀、熟、贖、述、属、秫」に「読作書」とある。献では「叔、淑、菽」に「読作蘇」とし、「蜀、熟、属、述」には「双無切」とある。遷安では「淑、菽、叔」に「読作書」とし、「熟、贖」には「双無切」とある。玉田では「熟、贖」は「時儒切」とある。大名では「菽読作書」、「叔読作暑」とある。内丘では「熟読作儒」とある。これらの例は内丘以外の地域では現代音に近いといえる。

43例をみる。「足」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の魚模韻〔tsiu〕に帰入している。現代音では陽平声〔tsu〕に帰入している。「沮」は《中原音韻》では陰平声の魚模韻〔tisu〕にある。現代音では上声〔tɕy〕である。この例も「近南音」の意味が判然としないが、《中原音韻》に近いといえる。だが、遷安と献では「子無切」とあるのでこの例は現代音に近いといえる。

44、45例をみる。「左」は《中原音韻》では上声の歌戈韻〔tsuo〕にある。現代音でも上声〔tsuo〕である。「族」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の魚模韻〔tsu〕に帰入している。現代音でも陽平声〔tsu〕に帰入している。「卒」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の魚模韻〔tsu〕に帰入している。現代音では陽平声〔tsu〕に帰入している。他の地域では、「族」を元氏と獲鹿は「読作租」とし、遷安と献では「子無切」とある。「卒」を元氏では「読作租」とし、献では「子無切」とある。この例はどの地域をみても、現代音とも《中原音韻》とも韻母が異なっているので「近南音」は韻母の問題であろう。

46例をみる。「托」と「套」は《中原音韻》に記載がない。「托」は現代音では陰平声〔t'uo〕に帰入している。「套」は去声〔t'au〕である。27例をあわせみると、「近南音」は韻母の問題であろう。

47例をみる。「殼」は《中原音韻》には記載がない。現代音では陽平声

〔k'y〕に帰入している。「巧」は《中原音韻》では上声の蕭豪韻〔k'au〕にある。現代音でも上声〔tɕ'iau〕である。「殼」は現代音では陽平声〔k'y〕のほかに去声〔tɕ'iau〕がある。「近南音」は韻母の問題であろう。

48例をみる。「軸」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の尤侯韻〔tɕiəu〕と魚模韻〔tɕiu〕に帰入している。現代音でも陽平声の語音〔tɕou〕と読音〔tɕu〕がある。「猪」は《中原音韻》では陰平声の魚模韻〔tɕiu〕にある。現代音でも陰平声〔tɕu〕である。36例から47例までは「近南音」という補注があるが、ここでは単に「近」という補注である。「近南音」と「近」にどのような差異があるか判然としないが、この例も韻母の問題であろう。

49、50例をみる。「粥」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の尤侯韻〔tɕiəu〕に帰入している。現代音では陰平声〔tɕou〕に帰入している。「周」は《中原音韻》では陰平声の尤侯韻〔tɕiəu〕にある。現代音でも陰平声〔tɕou〕である。50例では補注に「入声」とあり、12例と20例をあわせみても元氏にはこの時点でいまだ調類として入声は存在したのだろう。「近」の補注も明確な声調を示せないのだとしたら、調類の問題であるかもしれない。

51から54例をまとめてみる。「朱」は《中原音韻》では陰平声の魚模韻〔tɕiu〕にある。現代音でも陰平声〔tɕu〕である。「逐」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の魚模韻〔tɕiu〕に帰入している。現代音でも陽平声〔tɕu〕に帰入している。「竹」は清声母であるから《中原音韻》では上声の魚模韻〔tɕiu〕に帰入している。現代音では陽平声〔tɕu〕に帰入している。「燭」の帰入情況は「竹」と同じである。これらの例には「之類」という補注がある。韻母にはあまり問題はないように考えられるので調類の問題であろう。

55、56例をみる。「物」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の魚模韻〔u〕に帰入している。現代音でも去声〔u〕に帰入している。



「勿」の帰入情況は「物」と同じである。「五」は《中原音韻》では上声の魚模韻〔u〕にある。現代音でも上声〔u〕である。他の地域では「物」、  
「勿」を元氏では「読作務」、遷安と献では「読作霧」と音注し、大名では  
「物」を「読作務」と音注している。これらの地域では現代音に声調にお  
いても近い。「近」の補注は調類の問題であろう。

57例をみる。「役」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の齊  
微韻〔i〕に帰入している。現代音でも去声〔i〕に帰入している。「異」は  
《中原音韻》では去声の齊微韻〔i〕にある。現代音でも去声〔i〕である。  
他の地域、元氏、獲鹿、大名、玉田では「役」を「読作異」と音注し、補  
注はない。この例も調類の問題であろう。

58例は表Ⅰの32例とあわせみると、新樂、靈寿などの地域では特に問題  
はない。51例から54例のように大名の「之類」の補注は調類の問題であろ  
う。

59例をみる。「福」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の魚模  
韻〔fu〕に帰入している。現代音では陽平声〔fu〕に帰入している。「府」  
は《中原音韻》では上声の魚模韻〔fu〕にある。現代音でも上声〔fu〕で  
ある。他の地域、寧河、遷安、玉田は「福」を「読作府」と音注し補注は  
ない。献、大名では「読作夫」と音注している。地域により平声と上声に  
分かれるが、この例の補注「近」は調類の問題であろう。

60例をみる。「伏」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の  
魚模韻〔fu〕に帰入している。現代音でも陽平声〔fu〕に帰入している。  
「腐」は《中原音韻》には記載がない。現代音では上声〔fu〕である。他  
の地域、献、大名、元氏、玉田では「読作扶」と音注している。「近南音」  
の補注は調類の問題であろう。

61例をみる。「仏」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の  
魚模韻〔fu〕と歌戈韻〔fo〕に帰入している。現代音でも陽平声〔fu〕と  
〔fo〕に帰入している。「夫何切」は《中原音韻》では陽平声の歌戈韻〔fo〕

となる。現代音でも陽平声〔fy〕（実際には存在しない）となる。この例は《中原音韻》に近いといえる。

62例をみる。「活」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の歌戈韻〔xuo〕に帰入している。現代音でも陽平声〔xuo〕に帰入している。「和」は《中原音韻》では陽平声の歌戈韻〔xuo〕にある。現代では陽平声〔xuo〕もあるが、他に陽平声〔xy〕、去声〔xy〕、去声〔xuo〕、陽平声〔xu〕の四音がある。しかし、この例は特に問題となる点はないといえる。

63例をみる。「血」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の車遮韻〔xie〕に帰入している。現代音では上声〔ɕie〕と去声〔ɕye〕に帰入している。「捨」は《中原音韻》では上声の車遮韻〔sie〕にある。現代音でも上声〔sy〕である。この例はやや《中原音韻》に近いといえる。

64例をみる。「雪」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の車遮韻〔sie〕に帰入している。現代音でも上声〔ɕye〕に帰入している。「許耶切」は《中原音韻》では陽平声の車遮韻〔sie〕となる。現代音では陰平声〔ɕie〕になる。この例は中古薛韻が〔-ie〕と〔-ye〕に分かれたものである。

65例から85例まで中古入声韻に属していたもので音注している例である。

65例は屋韻を術韻で音注している例である。「宿」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の魚模韻〔siu〕に帰入している。現代音では上声〔ɕiou〕、去声〔ɕiou〕、〔su〕に帰入している。「戌」は《中原音韻》には記載がない。現代音では陰平声〔ɕy〕に帰入している。「宿」は他の地域、新樂、元氏、平山、靈壽、贊皇、猷、大名では「読作須」、遷安では「読作素」と音注している。すなわち、韻母が〔-iu〕と〔-u〕に分かれている。この例は〔-iu〕に近いと考えられるが、調類が問題である。

66例は燭韻を術韻で音注している例であり、情況的には65例と同様と見なしてよい。

67例は質韻を徳韻で音注している例である。元氏では入声の存在を12、

20、50例で示しているところから、この例も入声であろう。

68例は徳韻を質韻で音注している例である。「密」は《中原音韻》では「墨」と同音である。現代音では去声〔mi〕である。徳韻の多くは《中原音韻》では齊微韻に帰入する。3、4、5例でもそれがうかがえる。現代音のように歌戈韻に帰入している例は少ない。

69、70例は末韻を曷韻で音注している例である。「闊」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の歌戈韻〔k'uo〕に帰入している。現代音では去声〔k'uo〕に帰入している。「括」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の歌戈韻〔kuo〕に帰入している。現代音では去声〔k'uo〕と陰平声〔kua〕に帰入している。「渴」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の歌戈韻〔k'o〕に帰入している。現代音でも上声〔k'y〕に帰入している。「闊」、「括」が入声以外であるならば「可」など適当な陰声韻字があるので、この例も入声であろう。

71例は徳韻を錫韻で音注している例である。「的」は清声母であるから《中原音韻》では上声の齊微韻〔ti〕に帰入している。現代音では去声〔ti〕に帰入している。13例をみると、新楽、靈寿など贊皇とおよそ同じ例を挙げている地域では、「徳」を「読作堆上声」と音注しており、また17例をみると、新楽、靈寿では「的」を「読作堆上声」と音注している。贊皇では「徳」、「的」は入声であったのであろう。

72例は鐸韻を曷韻で音注している例である。「郭」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の蕭豪韻〔kau〕に帰入している。現代音では陰平声〔kuo〕に帰入している。「葛」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の歌戈韻〔ko〕に帰入している。現代音では陽平声〔ky〕に帰入している。「郭」は平山では「読作哥」と音注し、献では「読作果」と音注している。蕭豪韻に帰入している《中原音韻》は特殊な例といえる。この例も入声以外であれば特に「葛」で音注する必要がない。

73例は合韻を曷韻で音注している例である。「合」は全濁声母であるか

ら《中原音韻》では、陽平声の歌戈韻〔xo〕に帰入している。現代音でも陽平声〔xy〕に帰入している。声母に問題が残るが、この例も入声以外であれば入声で音注する必要はない。

74例は黠韻を屋韻で音注している例である。「八」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の家麻韻〔pa〕に帰入している。現代音では陰平声〔pa〕に帰入している。「卜」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の魚模韻〔pu〕に帰入している。現代音でも上声〔pu〕に帰入している。家麻韻と魚模韻が合流することはまれで、この例は地域的方音色が強い。

75例は緝韻を屋韻で音注している例である。「肉」の詳細は21例の通り。「入」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の魚模韻〔ziu〕に帰入している。現代音でも去声〔zu〕に帰入している。この例も入声以外であれば「如去声」などのように補注をつければ問題ないので、入声で音注する必要がない。

76例は陌韻を業韻で音注している例である。「額」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の車遮韻〔ie〕に帰入している。現代音では陽平声〔y〕に帰入している。「葉」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の車遮韻〔ie〕に帰入している。現代音でも去声〔ie〕に帰入している。この例は調類の問題を除けば《中原音韻》に近いといえる。

77例は陌韻を業韻で音注している例である。「客」は清声母であるから《中原音韻》では上声の皆来韻〔k'ai〕と車遮韻〔k'ie〕に帰入している。現代音では去声〔k'y〕に帰入している。「怯」は《中原音韻》では上声の車遮韻〔k'ie〕に帰入している。現代音では去声〔tɕ'ie〕に帰入している。調類の問題を除けば《中原音韻》に近いといえる。

78例は洽韻を業韻で音注している例である。「恰」は《中原音韻》には記載がない。現代音では去声〔tɕ'ia〕に帰入している。この例も入声以外であれば入声で音注する必要はない。

79例は覺韻を沃韻で音注している例である。「卓」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の蕭豪韻〔tʃau〕に帰入している。現代音では陰平声〔tʃuo〕に帰入している。表Ⅰの60例をみると、獻では「沃」を「読作臥」と音注しているのでこの例が入声であるかは疑問である。

80例は屋韻を屋韻で音注している例である。「覆」は《中原音韻》では「福」と同音である（59例）。現代音では去声〔fu〕に帰入している。この例も入声以外であれば入声で音注する必要はない。

81例は屑韻を狎韻で音注している例である。「結」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の車遮韻〔kie〕に帰入している。現代音では陽平声〔tɕie〕に帰入している。「甲」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の家麻韻〔kia〕に帰入している。現代音でも上声〔tɕia〕に帰入している。この例も入声以外であれば入声で音注する必要はない。

82例は薬韻を薛韻で音注している例である。「酌」は《中原音韻》には記載がない。現代音では陽平声〔tʃuo〕に帰入している。「哲」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の車遮韻〔tʃie〕に帰入している。現代音では陽平声〔tʃy〕に帰入している。入声韻尾の脱落により薬韻と薛韻が合流した例と思われる。調類としては入声であろう。

83例は昔韻を屑韻で音注している例である。「籍」は《中原音韻》には記載がない。現代音では陽平声〔tɕi〕に帰入している。「節」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の車遮韻〔tʃie〕に帰入している。現代音では陽平声〔tɕie〕に帰入している。この例も入声以外であれば入声で音注する必要はない。

84例は麦韻を屑韻で音注している例である。「隔」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の皆来韻〔kai〕に帰入している。現代音では陽平声〔ky〕に帰入している。「潔」は《中原音韻》には記載がない。現代音では陽平声〔tɕie〕に帰入している。この例も入声以外であれば入声で音注する必要はない。

85例は陌韻を屑韻で音注している例である。「格」は《中原音韻》、現代音ともに同様の帰入状況である。この例も入声以外であれば入声で音注する必要はない。

## 2 まとめ

本論をまとめるに際し、序論でも述べたように入声の他の調類への帰入状況と、その存在の有無の二点を重点的に各地域ごとにまとめてみる。他の調類への帰入状況は主に声母清濁の面からみる。

### 寧河

全濁声母（表Ⅰ36、表Ⅲ1、表Ⅲ2、表Ⅲ29例）は、すべて平声へ帰入し、原則的である。

次濁声母は、表Ⅱ2、表Ⅲ18例は去声へ帰入し原則的であるが、表Ⅱ2例は平声へ、表Ⅱ3例は上声へ帰入している。表Ⅰ14例は現代音では去声のもので音注しているが、《中原音韻》では上声のもので音注している。次濁声母については変則的であるといえる。

清声母は、表Ⅱ16、表Ⅲ22、表Ⅲ10例は上声へ帰入している。表Ⅰ3、表Ⅲ10例は平声へ帰入している。表Ⅱ16、表Ⅲ22例は現代音では上声のもので音注しているため、《中原音韻》における清声母上声へ帰入の原則が残っているといえる。

入声相互音注例は、表Ⅲ68、表Ⅲ69、表Ⅲ72の三例あるが、ほかに入声の存在を予想せしめる補注もないので、これだけではその存在の確認は難しい。

### 遷安

全濁声母（表Ⅰ21、表Ⅰ22、表Ⅰ23、表Ⅰ37、表Ⅰ38、表Ⅰ39、表Ⅰ50、

表 I 51、表 I 52、表 I 53、表 I 54、表 I 55、表 I 58、表 I 67、表 I 68、表 III 61例) は、すべて平声に帰入し、原則的である。

次濁声母は、表 I 11、表 I 12、表 I 28、表 I 59、表 I 60、表 I 61、表 I 62、表 III 34例は去声に帰入し、原則的であるが、表 I 14、表 I 15、表 I 16例は現代音では去声のもので音注し、《中原音韻》では上声のもので音注している。表 I 31例は平声に帰入している。しかし、後者 4 例も含めて現代音ではすべて被音注字と音注字が同音である。

清声母は、表 I 2、表 I 3、表 I 13、表 I 34、表 I 35、表 I 41、表 I 43、表 I 48、表 I 49、表 I 57、表 I 63、表 I 66、表 II 11、表 III 14、表 III 26、表 III 27例は平声に帰入し、表 II 12、表 II 14、表 II 15、表 III 8 例は上声に帰入し、表 II 13例は去声に帰入している。被音注字と音注字がいずれの例も現代音では同音もしくは近いものである。現代音清声母の帰入状況が明確ではないことをあわせみても、この地域はかなり現代音に近いといえる。

入声相互音注例はなく、入声の存在はないと考えられる。

## 献県

全濁声母 (表 I 1、表 I 7、表 I 24、表 I 25、表 I 53、表 I 54、表 I 55、表 I 58、表 I 67、表 I 68、表 I 72、表 I 73、表 III 1、表 III 61、表 III 62) は、すべて平声に帰入し、原則的である。

次濁声母は、表 I 11、表 I 12、表 I 28、表 I 59、表 I 60、表 I 61、表 I 62、表 III 4、表 III 6、表 III 18、表 III 32、表 III 35、表 III 79例は去声に帰入し、原則的である。表 I 14、表 I 15、表 I 16例は遷安と同じ状況である。表 I 30例も被音注字と音注字が現代音では同音であることから、現代音に近いといえる。

清声母は、表 I 3、表 I 8、表 I 9、表 I 13、表 I 34、表 I 57、表 I 66、表 I 69、表 I 71、表 I 74、表 II 12、表 II 17、表 II 18、表 II 19、表 II 20、表 II 21、表 II 22、表 III 14、表 III 23、表 III 26、表 III 27、表 III 30、表 III 31、表 III

64例が平声に帰入し、表Ⅲ 8、表Ⅲ 9 例が上声に帰入し、去声には帰入していない。このように大半が平声に帰入している。これがこの地域の特徴といえる。

入声相互の音注例は、表Ⅲ79例があるが表 I 60例をあわせてみれば入声の存在はないといえる。

## 玉田

全濁声母（表 I 4、表 I 32）は、平声に帰入している。また、声調だけの音注もあり、「族」、「石」、「集」、「極」、「昨」の全濁声母の例もすべて平声に帰入している。原則的である。

次濁声母は、表 I 3、表 I 26、表Ⅲ21、表Ⅲ34例は去声に帰入し、表 I 14、表 I 15、表 I 16例は遷安と同じ状況である。現代音に近いといえる。

清声母は、「国」が上声（表Ⅲ 8 例）と平声（表Ⅲ11例）に帰入し、また声調だけの音注では「客」が上声に帰入している。例が少ないので明確には判断しかねる。

入声相互音注例は表Ⅲ68例の 1 例あるが、1 例ではその存在の確認は難しい。

## 大名

全濁声母（表 I 6、表 I 7、表 I 9、表 I 37、表 I 38、表 I 39、表 I 50、表 I 51、表 I 52、表Ⅲ62例）は、すべて平声に帰入している。原則的である。

次濁声母は、表 I 14、表 I 15、表 I 17例は遷安の表 I 14、表 I 15、表 I 16例と同じ状況である。表 I 30、表Ⅱ 7 例は平声に帰入している。表Ⅱ 7 例は現代音とも合わない。表 I 42例のみ去声に帰入している。変則的であるといえる。

清声母（表 I 3、表 I 5、表 I 8、表 I 13、表 I 41、表 I 43、表 I 44、



表Ⅰ45、表Ⅰ46、表Ⅰ47、表Ⅱ9、表Ⅱ10、表Ⅲ23、表Ⅲ54例)は、すべて平声に帰入している。

声母の清濁に関わらず入声がほとんど平声に帰入している。これはこの地域の特徴といえる。

表Ⅲ51、表Ⅲ52、表Ⅲ53、表Ⅲ53、表Ⅲ58例の「之類」という補注は、声母に対するものとは考えがたい。韻母もしくは調類に対するものと考えるのが妥当である。韻母であるならば、音注字がいずれも複雑な母音構成ではないので、語末子音の有無である。しかし、すべての例が陰声韻に帰入し、入声相互の音注例もないので、明確な語末子音があるとは考えられない。調類の問題とするならば、音注字がいずれも平声（大半が平声に帰入しているのだが）であるが、平声ではないのだろう。語末子音のない、調値としては平声に近い調類のみの入声ということが考えられる。

#### 平山

全濁声母（表Ⅰ1、表Ⅰ7、表Ⅰ32、表Ⅰ33、表Ⅰ36、表Ⅲ1、表Ⅲ2例）は、すべて平声に帰入し、原則的である。

次濁声母は、表Ⅰ14、表Ⅰ15、表Ⅰ16例は遷安と同じ状況であり、表Ⅰ26、表Ⅲ18例は去声に帰入し、原則的ではあるが、表Ⅱ3、表Ⅱ4、表Ⅲ3例は上声に帰入し、表Ⅱ2例は平声に帰入している。変則的であるといえる。

清声母は、表Ⅰ8例は平声に帰入し、表Ⅱ1、表Ⅲ9、表Ⅲ22例は上声に帰入し、去声には帰入していない。《中原音韻》の清声母上声帰入の名残がややみえる。

入声相互音注例は、表Ⅲ75、表Ⅲ77、表Ⅲ84、表Ⅲ85例の4例ある。入声が存在したとしても、表Ⅲ77例のように陌韻[-k]を業韻[-p]で音注しているので、明確な語末子音[-p、-t、-k]は存在しない。他に、表Ⅲ48、表Ⅲ49、表Ⅲ57例に「近」という補注がある。「近」が大名での「之

類」と同質のものであれば、やはり調類のみの入声と考えられる。

### 贊皇 靈寿 新樂

この3地域については、例がほとんど一致しているので併せてみる。

全濁声母（表Ⅰ1、表Ⅰ7、表Ⅰ21、表Ⅰ32、表Ⅰ33、表Ⅰ36、表Ⅲ1、表Ⅲ2、表Ⅲ7例）は、すべて平声に帰入している。原則的である。

次濁声母は、表Ⅰ14、表Ⅰ15、表Ⅰ16例は遷安と同じ状況であり、表Ⅰ11、表Ⅰ26、表Ⅲ18例は去声に帰入しているが、表Ⅱ3、表Ⅱ4、表Ⅱ6、表Ⅲ3例は上声に帰入し、表Ⅱ2例は平声に帰入している。変則的である。

清声母は、表Ⅰ8例が平声に帰入し、表Ⅱ1、表Ⅲ9、表Ⅲ13、表Ⅲ17、表Ⅲ19、表Ⅲ22例は上声に帰入している。《中原音韻》に近いといえる。

入声相互音注例は、表Ⅲ69、表Ⅲ70、表Ⅲ72、表Ⅲ73、表Ⅲ75、表Ⅲ76、表Ⅲ77、表Ⅲ84、表Ⅲ85例の9例ある。表Ⅲ75例のように緝韻 [-p] を屋韻 [-k] で音注しているので、明確な語末子音 [-p, -t, -k] は存在しない。

他にこれらの地域では、「近」と「近南音」という補注のついた例がある。「近南音」は表Ⅲ36より表Ⅲ47例までと表Ⅲ60例の13例ある。「近」補注例は表Ⅲ48、表Ⅲ49、表Ⅲ57例の3例あり、前述の平山と一致している。調類のみの入声と考えられる。「近」補注例と入声相互音注例との関係は如何ようであろうか。入声相互音注例は、語末子音の区別 [-p, -t, -k] はないが、入声として比較的明確であると考えるのが妥当か。すなわち語末に喉頭閉鎖音 [-ʔ] が存在すると考えられる。

### 定県

全濁声母（表Ⅰ1、表Ⅰ21、表Ⅰ32、表Ⅰ33、表Ⅰ36、表Ⅲ1、表Ⅲ2例）は、すべて平声に帰入している。原則的である。

次濁声母は、表Ⅱ2例が平声に帰入しているものの、表Ⅰ11、表Ⅰ26、

表Ⅲ18例は去声に帰入しているの、ほぼ原則的である。

清声母は、表Ⅱ1、表Ⅲ9、表Ⅲ例は上声に帰入している。《中原音韻》に近いといえる。

入声相互音注例は表Ⅲ75、表Ⅲ76例の2例ある。2例では、ほかにその存在を予想せしめる補注もないので、入声の存在は確認できない。

### 内丘

全濁声母は、表Ⅰ4例の1例あり、平声に帰入している。

次濁声母は、表Ⅱ3、表Ⅱ8、表Ⅲ3例は上声に帰入し、表Ⅰ14、表Ⅰ15例は遷安と同じ状況であり、表Ⅱ5、表Ⅲ59例は去声に帰入している。上声に帰入している例が比較的多い。

清声母は、表Ⅰ10例は平声に帰入し、表Ⅱ1、表Ⅲ59例は上声に帰入し、表Ⅲ24例は去声に帰入しているものと思われる。例はいずれも少ないが、現代音と同様に明確な帰入原則はないと考えられる。

入声相互音注例は、表Ⅲ84、表Ⅲ85例の2例あるが、ほかに入声の存在を予想せしめる補注もなく、その存在を確認する事は難しい。

### 元氏

全濁声母（表Ⅰ7、表Ⅰ9、表Ⅰ21、表Ⅰ22、表Ⅰ32、表Ⅰ33、表Ⅰ36、表Ⅰ37、表Ⅰ38、表Ⅰ40、表Ⅰ55、表Ⅰ56、表Ⅰ58、表Ⅲ1、表Ⅲ2、表Ⅲ7例）は、すべて平声に帰入している。原則的である。

次濁声母は、表Ⅰ11、表Ⅰ18、表Ⅰ19、表Ⅰ20、表Ⅰ26、表Ⅰ28、表Ⅰ61、表Ⅰ62、表Ⅰ64、表Ⅰ65、表Ⅲ4、表Ⅲ18、表Ⅲ21例は去声に帰入し、表Ⅱ4例のみ上声に帰入している。原則的であるといえる。

清声母は、表Ⅲ22例が上声に帰入している1例がある。

入声相互音注例は、表Ⅲ67、表Ⅲ76、表Ⅲ77、表Ⅲ84、表Ⅲ85例の5例ある。しかし、表Ⅲ76例は表Ⅰ28例に「葉読作夜」とあるので、これは除

外する。表Ⅲ77例のように陌韻 [-k] で業韻 [-p] で音注しているのも、明確な語末子音 [-p、-t、-k] はない。また、元氏では表Ⅲ12、表Ⅲ20、表Ⅲ50例に「入声」という補注がある。これは、「国」（表Ⅲ12）、「索」（表Ⅲ20）、「粥」（表Ⅲ50）に適当な相当入声字がなかったためと思われる。入声としての水準は入声相互音注と同様であろう。

### 獲鹿

全濁声母は、表Ⅰ33、表Ⅰ36、表Ⅰ37、表Ⅰ40、表Ⅲ1、表Ⅲ2例が平声に帰入し、表Ⅲ28例が上声に帰入している。原則的であるといえる。

次濁声母は、表Ⅰ11、表Ⅰ26、表Ⅰ28、表Ⅰ29、表Ⅰ61、表Ⅰ64、表Ⅲ5、表Ⅲ18、表Ⅲ21例が去声に帰入している。表Ⅰ14、表Ⅰ15、表Ⅰ16例は遷安と同じ状況である。ほぼ原則的であるといえる。

入声相互音注例は、表Ⅲ65、表Ⅲ66、表Ⅲ74、表Ⅲ78、表Ⅲ80、表Ⅲ81、表Ⅲ82、表Ⅲ83、表Ⅲ84例の9例ある。表Ⅲ78例 [-p] と表Ⅲ80例 [-k] は同韻尾入声で音注している。その他は、[-k] 韻尾入声を [-t] 韻尾入声で音注している例（表Ⅲ65、表Ⅲ66、表Ⅲ82、表Ⅲ83、表Ⅲ84例）、[-t] 韻尾入声を [-p] 韻尾入声で音注している例（表Ⅲ81例）、[-t] 韻尾入声を [-k] 韻尾入声で音注している例である。[-k] 韻尾入声と [-p] 韻尾入声間で音注している例はない。[-ʔ] 韻尾入声に集約された可能性がある。

### 結語

全体的にみると、全濁声母はどの地域を問わずだいたい平声に帰入している。次濁声母は過半数が去声に帰入しているが、上声に帰入している例も少なくない。この傾向は河北省南西部の地域に強くあらわれている。清声母については平声、上声のいずれかに帰入している例がほとんどで、去

声に帰入している例は非常に少ない。

石家荘にほど近い靈寿、贊皇、新樂、平山、獲鹿、元氏の各地域に入声の存在を予想せしめる例が多く、邯鄲に近い大名に一部入声の存在をうかがわせる例がある。これら南西部、南部の地域に対して、東部地域の寧河、玉田、遷安、獻県では入声は既に完全に他の声調へ帰入していると考えられる。定県、内丘では入声を確認できる例がわずかなので、石家荘に地理的に近いとはいえ、その存在は明確ではない。

- 注1 《中原音韻》擬音は楊耐思著《中原音韻音系》(中国社会出版社=中国、1981年10月)、四《中原音韻》音系・(一)《中原音韻》的声母(14頁~29頁)および同著(二)《中原音韻》的韻母(29頁~44頁)参照。
- 注2 王力著《漢語史稿・上冊》(科学出版社=中国、1958年、8月)、第廿三節 現代漢語e和ə的来源 (一) ie、ye的来源(152頁~155頁)参照。
- 注3 中古擬音は李栄著《切韻音系》(鼎文書局=台湾、1973年、10月)、七声母的討論(116頁~128頁)および同著 八 韻母的討論(129頁~151頁)参照。
- 注4 矢澤秀昭《入声韻尾の代替変化について》(漢学研究、1990年3月)参照。
- 注5 王力著《漢語史稿・上冊》(科学出版社=中国、1958年、8月)、第廿二節 現代漢語a和o的来源 (二) 現代漢語o的来源(146頁~151頁)参照。
- 注6 矢澤秀昭《入声韻尾の代替変化について一文白異読を中心にして》(漢学研究、1992年、3月)参照。
- 注7 《新华字典》(商務印書館=中国)には、色、落、扱、鑿、塞の五文字に口語詞と書面語詞の音の相違が記載されているが、《國音字典》(台湾商務印書館=台湾)にはこの例の他に八十字余に読書音と白話音の別がなされている。